

設立30周年記念

# 研究紀要

## 第25号

事業団の沿革

30年のあゆみ

縞条体圧痕文の付く野島式土器

金子直行

—早期後葉における縞条体圧痕文の付く細隆起線文土器の関係性について—

縄文前期中葉から後葉土器群の系統関係とその意味

細田勝

加曾利E式土器の終焉と称名寺式土器の関係

上野真由美

土偶研究とジェンダー考古学（1）

小野美代子

荒川流域出土の大席式土器について

栗岡潤

関東地方における古墳時代前期の木器と低地遺跡

福田聖

旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について

瀧瀬芳之

—埼玉県内出土象嵌遺物の研究（その2）—

国界地域の土器流通

赤熊浩一

—下総国と武藏国の様相—

地震で沈んだ倉と古代の集落

田中広明

2011

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 白井沼遺跡出土大麻式土器



2 大型壺口縁部（白井沼）



3 複合口縁壺（白井沼）



4 鋼冶屋・新田口遺跡（非掲載）



5 大型壺口縁部（川合遺跡）



6 大型壺口縁部（川合遺跡）



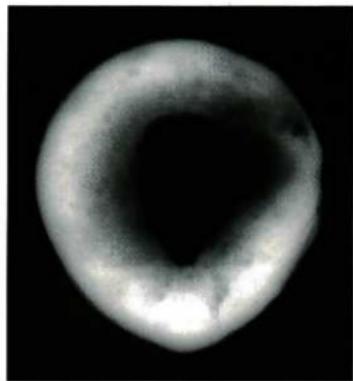
7 大型壺口縁部（川合遺跡）



8 大型壺口縁部（川合遺跡）

## 口絵2

瀧瀨論文 X線透過写真



SPM88-041-12



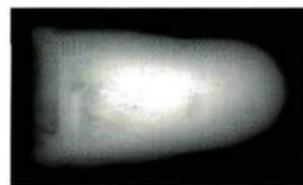
SPM88-041-16



SPM88-041-63



SPM88-041-64



# 国界地域の土器流通

—下総国と武藏国との様相—

赤熊 浩一

**要旨** 古代社会において、各地で生産された土器の流通は、どのように行われていたのだろうか。特に、律令制下の国境の地域では、国を越えて土器の流通がどのように行われていたのか、この問題について、下総国と武藏国とのそれぞれ隣接する遺跡の様相を通して明らかにしたい。そこで、遺跡から出土した土器の生産地と時期を特定し、消費されている土器の組成について分析を行った。その結果、国を越えて流通する土器、国を越えず流通する土器があることが捉えられた。土器の流通は、古墳時代以来の伝統的な在地社会の関係を示す地域圈と政治的な律令社会の国を示す領域圏の中で交錯する動きがあることが明らかになった。古代社会における国境や都界は、行政単位の領域圏であると同時に、人民と土地への支配権がおよぶ範囲でもある。古代の土器の生産と流通は、在地社会の規範の中で成立していた地域圏と行政単位の領域圏の区分の中で在地主導か、政治主導なのか理解することができる。

## 1 はじめに

古代、律令社会における下総国と武藏国の国境地域では、両国で生産された土師器や須恵器が交錯し流通している。本来、土器は、古墳時代以来の地域的交易圏が確立していると考えられている（長谷川1995）。古墳時代の交易の方法に河川がある。かつて、熊谷市下田町遺跡から出土した海産物と、東京湾の三浦半島沿岸から北武藏の土器が出土することから、古墳時代の河川交易と捉え論考したことがあるが（赤熊2001）、このような古墳時代の交易圏をベースに律令社会ではどのように土器の流通が行われたのか。その結果、国境がどのような地域を分けて行われたのか。遺跡から出土する土器産地分類を通して土器の流通を明らかにする。

国界地域に流通する主な須恵器の産地は、武藏国の末野窯跡・南比企窯跡・東金子窯跡・常陸国の新治窯跡・堀の内窯跡・下野国の三毳窯跡・下総国の三和窯跡などがある。これらの窯跡で焼かれる須恵器は、胎土や調整技法・形態に特徴がある。武藏国の寄居町末野窯跡は、北武藏の荒川上流域にあたり、三波川変成帯にあたる秩父や長瀬

の結晶片岩が粘土に含まれる。ここで焼かれた須恵器は片岩が多く含まれ、比重の軽い胎土で、8世紀前半にヘラ切りから糸切りへ転換する特徴がある。また、比企郡鳩山町南比企窯跡は、比企丘陵の一角にあたり、石英や輝石などの砂粒を含み、海綿状骨針の化石が粘土に含まれる。ここで焼かれた須恵器は白色針状物質が浮かびあがる特徴がある。さらに、入間市東金子窯跡は、きめの細かな粘土を使い重量感があり、土器の器壁がやや厚い特徴がある。常陸国の新治窯跡は、雲母が粘土に含まれざらつき軟質焼成である。ここで焼かれた須恵器は箱形で回転ヘラ切り、底部縁辺をヘラ削りする特徴がある。堀の内窯跡は、きめの細かな粘土を使い白色粒子が比較的目立つ特徴をもっている。下野国の三毳窯跡は、黒斑の混ざる灰白色の粉っぽい胎土で軟質焼成である。須恵器は8世紀後半にヘラ切りから糸切りへ転換する特徴がある。下総国の三和窯跡は、白色粒子を多量に粘土に含み、比重の軽い胎土である。須恵器は箱形で回転ヘラ切り、底部縁辺をヘラ削りする特徴がある。

さらに、土師器は、生産地がまだ明らかにさ

れていないが、流通する地域の特徴から、北武藏で生産された北武藏型坏・比企型坏・有段口縁坏・横敵坏・武藏型甕、常陸で生産された常縦型甕、武藏・下総の国界地域で生産されたと見られるロクロ土師器などがある。

ここでは、古墳時代の終り頃から奈良時代、平安時代に至るまでの約250年間の遺跡から出土する土器の生産地について見てみる。

## 2 下総国における土器の流通

### (1) 下総台地にある庄和地域の土器

庄和地域は、現在春日部市の一帯にあたるが、古代においては下総台地の西側縁辺の武藏国に接する地域であり、下総国葛飾郡にある。集落から出土する土器は、武藏・常陸・東海地域で生産された製品が出土する特徴をもつ。

古墳時代終り頃の7世紀後半、庄和地域で日常の供膳器として使われていた土師器坏は、在地で生産された坏のほかに、北武藏地域で生産された口縁部が内溝し丸底の北武藏型坏、口縁部に段を持つ有段口縁坏、須恵器坏の形を真似た横敵坏、武藏比企地域を中心に生産された口縁部に弱い屈曲をもち内外面が赤く塗られた比企型坏などである。煮沸具として使われる土師器甕は、武藏や上野地域を中心に生産され使われていた武藏型甕である。また須恵器は、東海地方の浜名湖西岸地域を中心に生産された湖西産の坏・蓋、そして貯蔵具として使われた大型の甕・壺などがある。この時期は、武藏国と東海地域とのかかわりが強く、元荒川や古利根川などの河川交通を利用した交流や海洋交通を利用した交流が見られ、古墳時代的土器流通として捉えることができる。

8世紀の初め頃には、地域ごとに生産されていた様々な種類の土師器坏は、生産されなくなり北武藏型坏に統一され、各地でこの坏が流通し、主体的に使われるようになる。庄和地域の集落からも、北武藏型坏と北武藏型暗文坏・北武藏型皿・

武藏型甕が出土する。須恵器は、武藏国内で生産されている寄居町末野窯跡の製品が広範囲に流通するが、この地域には末野産須恵器の供給が認められず、古墳時代末からの湖西産須恵器の供給を受け使われている。土師器は北武藏からの供給を受け、須恵器は東海地方からの供給を受けており、こうした傾向は、この時期の土師器と須恵器の流通の在り方の特徴として見ることができる。

8世紀前半になると、土師器坏は、北武藏型坏の出土が希薄となる。坏類は、土師器から須恵器に変化する。須恵器もこれまで供給を受けていた湖西産が東国全域で見られなくなる。庄和地域でも出土しなくなり、変わって常陸国的新治窯跡で生産された須恵器が定量出土する。国産須恵器が領域間に流通すると理解できる。煮沸具の土師器甕は、從来からの武藏型甕と常陸国内で生産された常縦型甕が出土する。この常縦型甕を生産した遺跡は発見されていないが、土器の胎土などから霞ヶ浦北部、筑波山南東部の山裾に広がる台地上で生産されていたと考えられている(佐々木2007)。これは、新治産須恵器の生産地域と重なっている。本来下総国の地域は、常陸国で生産された新治窯の須恵器と常縦型甕が主体的に流通するようになり、国単位による生産・流通に変化し律令時代的土器流通と捉えることができる。しかし、庄和地域は常陸国の製品を主体としながら、武藏国製品も受け入れていることから、国界地域の特徴として位置づけられる。

奈良時代の中葉から後半になると須恵器の出土状況に新たな展開が見られる。これまでの新治窯跡の製品に加えて、下野国の佐野市東側の大平山三毳山で焼かれた三毳産須恵器、武藏国比企丘陵で焼かれた南比企産須恵器、同じく武藏国入間郡の加治丘陵で焼かれた東金子産須恵器が出土するようになる。また、生産地は不明であるが、下総国の東部地域を中心に分布が見られるロクロ土師器が出土する。下総国葛飾郡や武藏国足立郡な

どの地域では、新たな窯でロクロ土師器の生産を開始したと考えられる。これは、各地域の地方窯の製品流通が拡大したこと意味している。須恵器生産体制が新しく造られ、生産された製品が商品化され、各地域に流通を拡大し、新たな生産窯の流通構造が成立したと捉えることができる。

この時期、武藏国一下總国一常陸国間の人や物の往来・さまざまな物資流通が多くなり、道の新設や整備が行われた。その結果として、宝亀二年(771)に武藏国が東山道から東海道へ所属替えが行われた。また、上総国から下総国に至る東海道が、これまで相模国の中浦半島から上総国に富津岬に至るルートであったのが、相模国から武藏国を経由し下総国に至る陸路を通るルートに変わっている。海上交通・河川交通に加え、陸上の道路交通網が整備されたことが起因となり、須恵器流通に変化が生じたのだろうか。

9世紀前半になると、従来的に新治窯の製品が出土するが、下総国北部の結城郡に三和窯が開窯し、庄和地域はもとより下総国から武藏国東部地域の集落に供給を始める。この三和窯跡は、新治の須恵器工人のもつ技術を導入し、8世紀後半の新たな下総国内の須恵器窯跡としてその存在は大きい。

9世紀後半になると、在地生産窯がさらに拡大し、地方窯の製品が益々多様化していく。ロクロ土師器も生産の拡大が見られる。庄和地域では、新治窯の製品が減少化する傾向の中で、常陸国堀内窯跡や武藏国末野窯跡、東金子窯跡の製品が出土する。また、常総型壺や武藏型壺も出土する。このように庄和地域では、これまで主流となっていた新治窯の製品供給が弱まる一方で、地方窯跡の製品供給が見られることから、律令時代的土器流通から地方窯台頭の流通へと転換したと捉えられる。

国衙的工房として国内の須恵器需要に対応していた須恵器窯は、この時期に衰退をはじめ地方の

在地有力層を主体とした中で、須恵器生産が再編され継続して行われていたと考えられる。

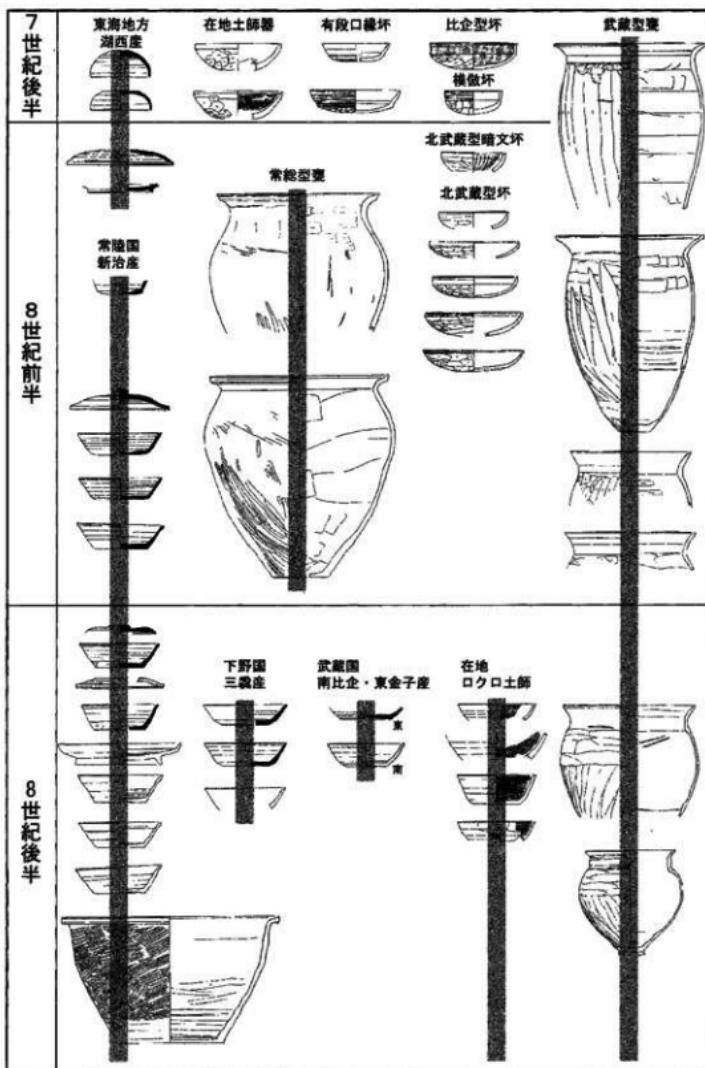
10世紀になると、須恵器の出土は見られなくなり、須恵器生産の終焉と捉えることができる。律令体制の中で行われていた須恵器生産が根本から崩壊したのである。変わって、在地生産のロクロ土師器が主体となる。また、煮沸具は、常総型壺と武藏型壺がかろうじて出土するにとどまる。そこには、在地有力豪族による土器生産へのかかわりが想定され、私的個別生産による商品経済への展開とも捉えられる。

庄和地域から出土する須恵器・土師器の生産地を見てきたが、その時代の人々がどの地域で生産された土器を手に入れ使用していたのか、また、供養具と煮沸具では、供給の関係が異なっていることもわかつてきた。土器の流通は、社会の変化に影響され、時代とともに変化している。

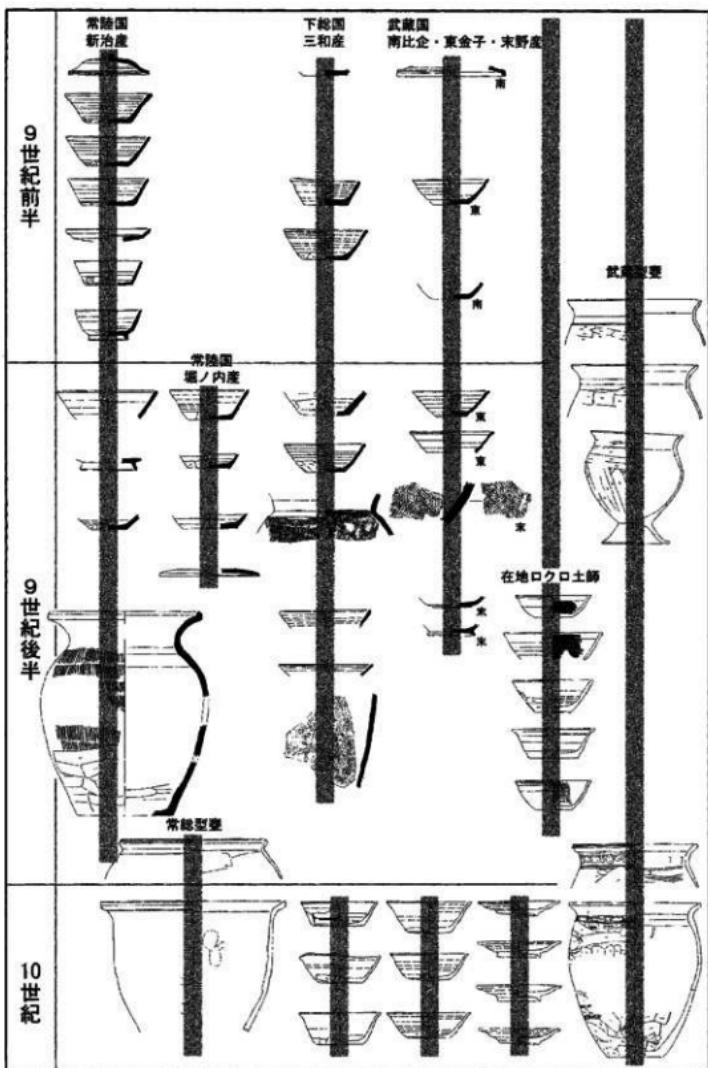
## (2) 流山市加地区遺跡群の土器

流山市加地区遺跡群は、流山駅の北300mに位置し、江戸川に面した下総台地の縁辺に広がる遺跡群である。この遺跡群は、北谷津遺跡・若宮遺跡・町畠遺跡から成り、奈良・平安時代の堅穴住居跡138軒の調査が行われた集落遺跡群である。遺跡の立地する地域は、下総国葛飾郡にあたり、先の庄和地域同様、集落から出土する土器は、様々な地域で生産された製品が出土する特徴をもつ。

古墳時代終り頃の7世紀後半、土師器壺は在地で生産された丸底の壺のほかに、北武藏地域で生産された口縁部が内湾し丸底の北武藏型壺、口縁部に段を持つ有段口縁壺、須恵器壺の形を真似た模倣壺、武藏比企地域を中心に生産された口縁部に弱い屈曲をもち内外面が赤く塗られた比企型壺がある。煮沸具として使われる土師器壺は、武藏型壺と常総型壺である。また、須恵器は、東海地方の湖西産の环目が出土している。この時期は、武藏国と東海地域とのかかわりが強く古墳時代的



第1図 庄和地域の土器（1）



第2図 庄和地域の土器（2）

土器流通として捉えることができる。

8世紀の初め頃には、北武藏型壺・北武藏型皿・武藏型壺が出土する。須恵器は、古墳時代末からの湖西産須恵器の供給を受ける一方で新治産須恵器の供給へと変化し始める。

8世紀前半になると、土師器壺は北武藏型壺の出土が希薄となる。須恵器もこれまで供給を受けていた湖西産が見られなくなり、常陸国的新治窯跡の須恵器が定量出土する。煮沸具の土師器壺は、從来からの武藏型壺と常陸国内で生産された常総型壺が出土する。下総国の地域は、常陸国で生産された新治窯の須恵器と常総型壺が主体的に流通するようになり、国単位による生産・流通に変化し律令時代的土器流通と捉えることができる。しかし、煮沸具の武藏型壺の製品は受け入れており、國界地域の特徴として位置づけられる。

8世紀の中葉から後半になると須恵器の製品に新たな展開が見られる。これまでの新治窯跡の製品に加えて、武藏国の中葉から後半になると須恵器が定量出土する。さらに、東金子産須恵器も見られる。また、下総国の東部地域を中心に分布が見られるロクロ土師器も出土する。

9世紀前半になると、常陸国新治窯の製品が出土するが、三和窯が開窯し、集落に供給を始める。

9世紀後半になると、在地生産窯がさらに拡大し、地方窯の製品が益々多様化していく。ロクロ土師器の出土量も多く見られる。一方で、新治窯の製品が減少化する傾向の中で、常陸国固ノ内窯跡や武藏国末野窯跡・東金子窯跡の製品が出土する。また、常総型壺や武藏型壺も出土する。

10世紀になると、須恵器の出土は見られなくなり、在地生産のロクロ土師器が主体となる。また、煮沸具は、常総型壺と武藏型壺が出土し、須恵器は終息する。

### 3 武藏国における土器の流通

#### (1) 八木崎遺跡の土器

春日部市八木崎遺跡は、春日部駅の西1kmに位置し、古利根川に面した自然堤防上に集落は形成されている。奈良・平安時代の豊穴住居跡53軒の調査が行われた集落遺跡である。遺跡の立地する地域は、武藏国埼玉郡にあたり、遺跡北側には浜川戸遺跡が所在する。本遺跡から出土する土器も庄和地域や加地区遺跡群同様、様々な地域で生産された製品が出土する特徴をもつが、大きく異なる点は、常総型壺の出土が見られないことである。

8世紀前半、土師器壺は北武藏型壺が出土する。須恵器は、南比企産と常陸国的新治窯跡の供給を受ける。煮沸具の土師器壺は、武藏型壺が出土する。下総国の地域で見られた常陸国で生産された常総型壺は認められないものの、新治産須恵器の供給が安定的に見られ武藏の国界地域の特徴として位置づけられる。

8世紀の中葉から後半おいても須恵器の供給は、これまで同様、南比企産と新治産の製品が定量出土する。さらに、東金子産須恵器も見られる。土師器壺は、武藏型壺が出土し常総型壺は認められない。

9世紀前半になると、継続的に南比企産が供給されるが、新治産の製品が見られなくなる。また、三和窯跡の開窯に伴い製品が集落に供給を始める。さらに、末野窯跡とロクロ土師器が見られるようになる。土師器壺は、武藏型壺が出土し、常総型壺は認められない。

9世紀後半になると、南比企産よりも三和窯や末野窯跡が駆逐する供給へと変化する。さらに、ロクロ土師器の出土量も多く見られる。また、土師器壺は、武藏型壺に加え、常総型壺も出土する。

この時期初めて常総型壺が武藏国の国界地域に出土し、流通することが確認され、領域圈が崩れかけたと考えられる。

#### (2) 中川低地の土器

中川低地に所在する春日部市小渕山下北遺跡、春日部市浜川戸遺跡、さいたま市府内三丁目遺跡

の土器様相は、先の八木崎遺跡と共通性が認められる。

8世紀の初め頃は、北武藏型壺・北武藏型皿・武藏型甕が出土する。須恵器は、古墳時代末から湖西産須恵器の供給を受ける一方で南比企産と新治産須恵器の供給を受ける。

8世紀前半、土師器壺は北武藏型壺が出土する。須恵器は、南比企産と常陸国的新治窯跡の供給を受ける。煮沸具の土師器甕は、武藏型甕が出土する。

8世紀の中葉から後半においても須恵器の供給は、これまで同様、南比企産と新治産の製品が定量出土する。さらに、東金子産須恵器も見られる。土師器甕は、武藏型甕が出土し、常総型甕は認められない。

9世紀前半になると、継続的に南比企産と新治産が供給される。また、三和窯の開窯に伴い製品が集落に供給を始める。さらに、末野窯跡産と東金子産が見られるようになる。土師器甕は、武藏型甕が出土し、常総型甕は認められない。

9世紀後半になると、南比企産・三和産・末野窯跡産・東金子産・新治産の供給を受ける。さらに、ロクロ土師器の出土量も多く見られる。また、武藏型甕に加え、常総型甕も出土する。

### (3) 大宮台地・加須低地の土器

大宮台地の元荒川流域に所在する蓮田市椿山遺跡、行田市築道下遺跡の土器様相は、先の八木崎遺跡などの中川低地の遺跡とは異なり、東関東系の新治産・三和産・三毳産の須恵器供給は見られない。

8世紀の初め頃は、北武藏型壺・北武藏型皿・武藏型甕が出土する。須恵器は、古墳時代末からの湖西産の供給を受ける一方で南比企産と末野産の供給を受ける。また上野産須恵器が見られる。

8世紀前半、土師器壺は北武藏型壺が出土する。須恵器は、南比企産と末野産の供給を受け、東金子産・上野産が見られる。煮沸具の土師器甕は、

武藏型甕が出土する。

8世紀の中葉から後半においても須恵器の供給は、南比企産が圧倒的な供給体制である。わずかに、末野産と東金子産が見られる。土師器甕は、武藏型甕が出土し、常総型甕は認められない。

9世紀前半にも、継続的に南比企産が多く、末野窯跡産と東金子産が見られる。土師器甕は、武藏型甕が出土し、常総型甕は認められない。

9世紀後半においても、南比企産と末野窯跡産の供給を受ける。椿山遺跡では、ロクロ土師器が多く供給されている。

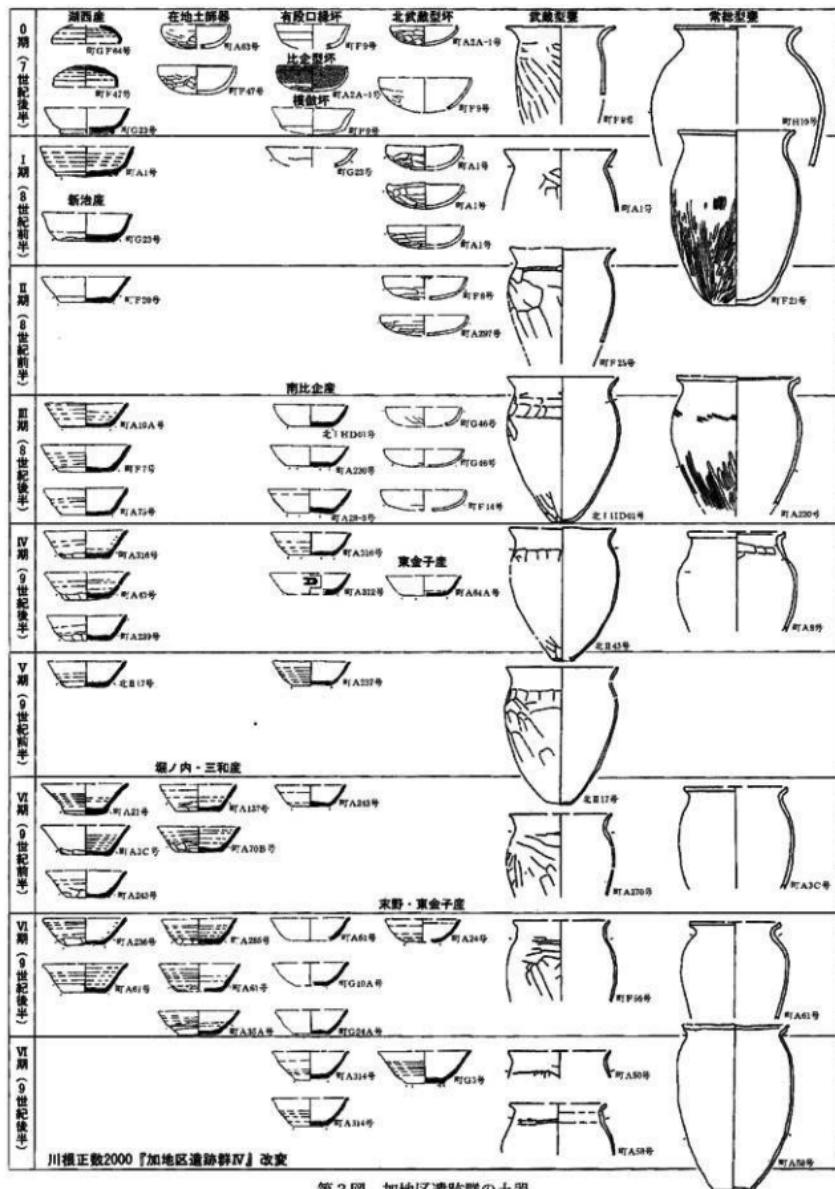
加須低地に所在する加須市水深遺跡の土器様相は、先の築道下遺跡などの大宮台地の遺跡と同じような供給であるが、注目される点は、8世紀の中葉から後半において、東関東系の新治産・三毳産の須恵器供給が少量ながら見られることである。

### 4 武藏型甕と常総型甕

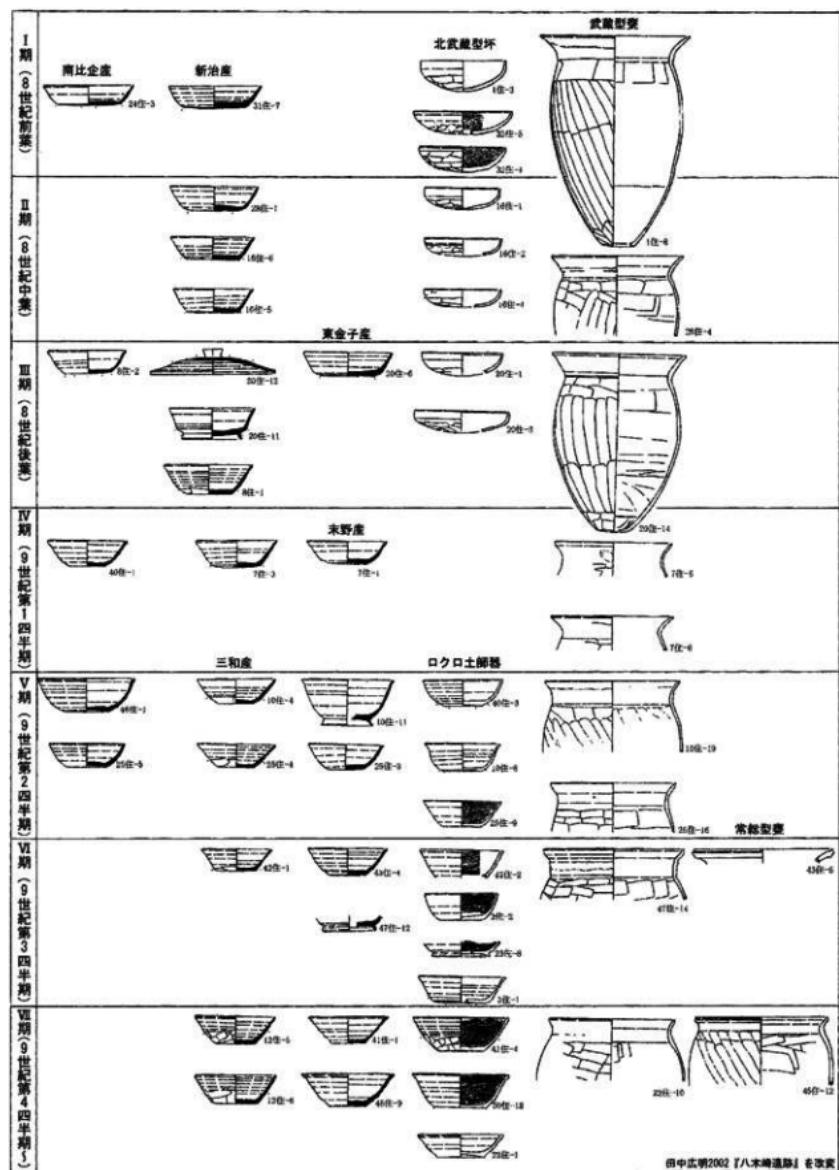
煮沸に使う甕は、古墳時代以来伝統的な素焼きの土師器が使われ、その生産方法や形は、地域性が強く、各地域ごとに作られ使用されていたと考えられてきた。ところが律令制下の奈良時代になるとその様相は変化し、国ごとに生産・流通が行われ、武藏型甕・常総型甕・上総型甕・相模型甕などの流通の領域図が見られるようになる。

武藏国内で、武藏型甕を使用していたのに対し、下総国内では、常総型甕が使われていた。武藏型甕の生産地はまだ特定されていないが、加須市水深遺跡や蓮田市荒川附遺跡などで、土師器生産窯が検出されていることから、古利根川や元荒川の流域に供給されると考えられる。常総型甕の生産地は筑波山の南側地域や霞ヶ浦周辺域で、鬼怒川を経由して古利根川を通り、中川に合流してこれらの流域に供給されたと考えられる。このように、古代における土器流通は、河川交通を利用して運ばれていたことが考えられる。

前述の武藏型甕と常総型甕の国界地域における



第3図 加地区遺跡群の土器



第4図 八木崎遺跡の土器

出土状況をみると、流通のあり方に特徴がみられた。このあり方について、高橋一夫氏は、「武藏型甕と常陸型甕」の論考の中で詳細な分析を行い、両者の甕の出土比率を地域ごとに分析している。それによると武藏型甕は下総国内の東側地域に一定量流通している。またこの両者の甕は、形態的な特徴の差があり、武藏型甕は、土器の厚みが非常に薄く、軽く作られ熱効率も高い。大きさも高さが平均25cm程度、幅も20cm程度で、非常にコンパクトな形態である。一方、常陸型甕は、厚さが5mm、高さも平均で30cm、幅30cm程度あり、武藏型甕と比較すると大きい。この異なる形態の甕が同じ竪穴住居跡から出土していることに注目し、竪穴住居内の煮炊きをするカマド施設の構造による違いを指摘し、異なる大きさの甕をかける掛け口の大きさによるものであると結論づけている。

常陸型甕には、はじめから大型の甕と小型の甕が存在し、大型甕は煮炊きや瓶を上に載せて使用するなど長時間の調理に用い、小型甕は、熱効率を速め、煮炊きや湯を沸かす時に使われていたと考えられている。これら、大小の甕を日常的に使っていった下総国の地域は、古墳時代に武藏型甕を手に入れると、小型甕の代用として使用していたものと考えられる。一方武藏国内の、武藏型甕しか使ってない地域では、そもそも竪穴住居内に設置されたカマド構造に問題があり、大型の甕をかける構造ではないため、常陸型甕を使用することはできなかった。このため、下総国内では、両者の甕が併用される一方、武藏国内では流通しなかったのだと高橋氏(高橋2010)は指摘している。

## 5 国界地域の鉄生産

庄和地域の権現山遺跡からは、鉄生産にかかる竪型炉の大口径羽口が出土した。また、吉岡遺跡からは、小鋸冶に使われる小口径の羽口が出土している。奈良時代前半に権現山遺跡の周辺で砂鉄から鉄素材を造り、これを吉岡遺跡で加工する

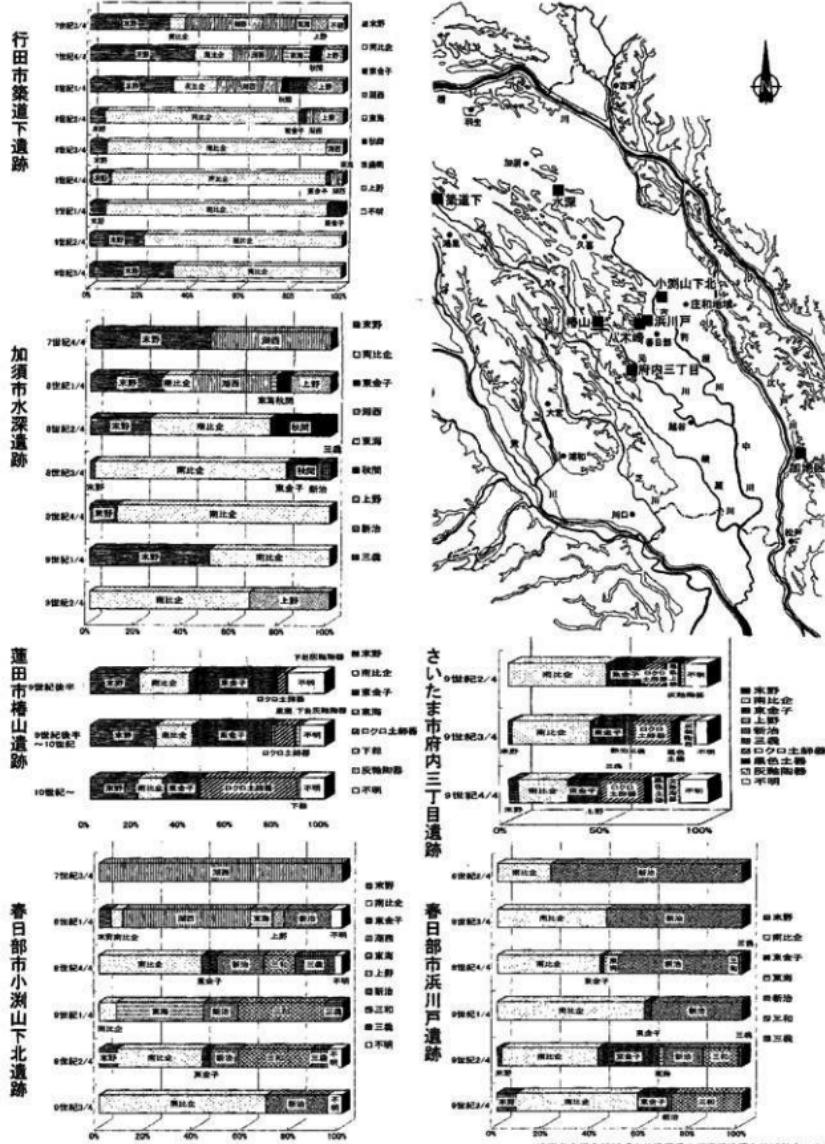
といった鉄生産が行なわれていた可能性がある。

鉄製品の生産は、奈良時代になると東国各地で行われるようになる。砂鉄は、利根川流域や電ヶ浦などで川砂鉄が採取され、鹿島灘でも海砂鉄が採取されたと考えることができる。鉄生産に使用された製鉄炉は、古墳時代の終り頃から奈良時代の初め頃にかけては、長方形箱形炉と呼ばれる方形の炉であったが、奈良時代前半になると竪形炉と呼ばれる円筒形の炉に変化する。下総地域では、初期の東海道に面した埴生郡や印旛郡などで箱形炉による鉄生産が行われ、成田市東峰御幸畠町遺跡や取香和田戸遺跡、芝山町沖の台遺跡・岩山中袋遺跡、多古町一鉢田甚兵衛山北遺跡などで箱形炉を検出している。

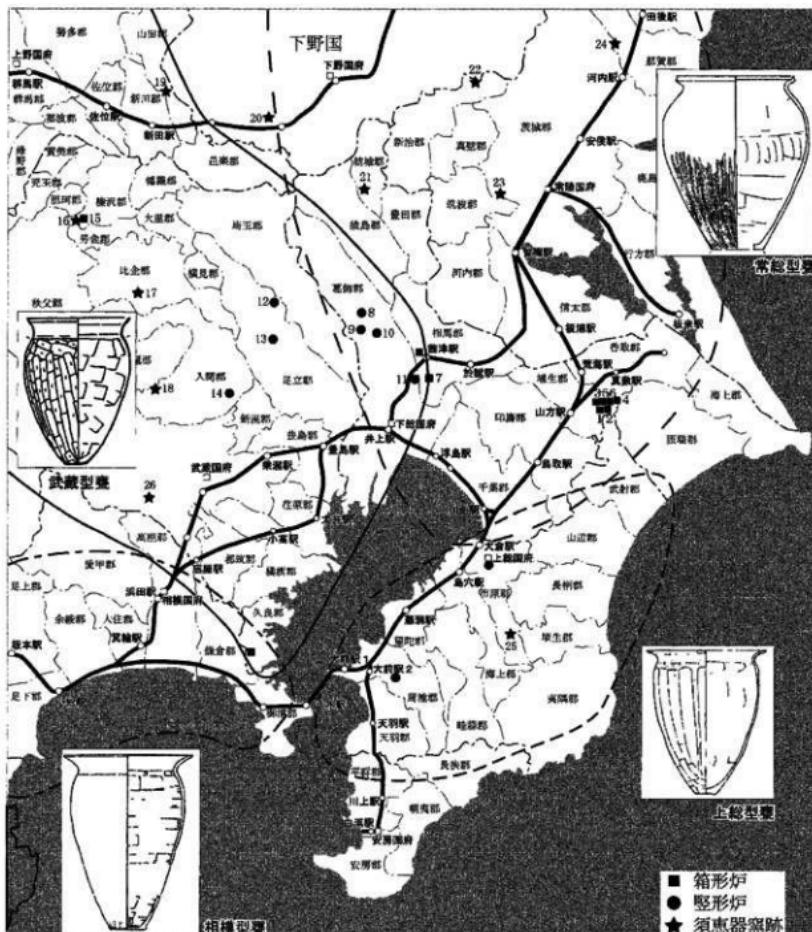
ところが、竪形炉の生産地域は、これらの地域とはことなり、新たに開かれた東海道の西側に展開がみられ、葛飾郡を中心としている。流山市中ノ坪I・II遺跡・富士見台II遺跡、柏市花前遺跡、沼南町宮原後原遺跡などである。武藏国では、伊奈町大山遺跡、桶川市宮の脇遺跡、白岡町たたら山遺跡、蓮田市椿山遺跡、川口市猿貝北遺跡などである。

中ノ坪I・II遺跡や富士見台II遺跡は8世紀第1四半期に生産が開始されている。武藏国内では、宮の脇遺跡が8世紀第2四半期である。このように、国界の地域の竪型炉による鉄生産はいずれも、各国内の国府・国分寺に供給するため生産が行なわれたと考えられる。

『古代武藏国の須恵器流通と地域社会』のシンポジウムにおいて、星間孝志氏は「ロクロ土師器の流通」について論じている。この中で、今回取り上げた国界の地域では、9世紀になるとロクロ土師器の生産地と流通領域が存在することを指摘している。下総地域では、ロクロ土師器の土器焼成坑が流山市思姫ノ内遺跡、八千代市梅原後遺跡などで発見されており、また武藏国内においても、下野田福荷原遺跡でロクロ土師器の焼成坑の存在



第5図 須恵器供給変遷図



- |                |                |               |                |
|----------------|----------------|---------------|----------------|
| 1 沖ノ台 芝山町      | 8 中ノ坪 I・II 流山市 | 15 笹石 寄居町     | 22 堀之内窯跡 桜川市   |
| 2 岩山中袋 芝山町     | 9 富士見台IIc 流山市  | 16 末野窯跡 寄居町   | 23 新治窯跡 土浦市    |
| 3 天神峰奥之台 成田市   | 10 花前Ⅱ 柏市      | 17 南比企窯跡群 埼玉町 | 24 木葉下窯跡 水戸市   |
| 4 一錆田甚兵衛山北 多古町 | 11 宮後原 沼南町     | 18 東金子窯跡 入間市  | 25 永田・不入窯跡 市原市 |
| 5 取香和田戸 成田市    | 12 宮ノ監 植川市     | 19 太田金山窯跡 太田市 | 26 御殿山窯跡 八王子市  |
| 6 東峯御幸畑坂 成田市   | 13 大山 伊奈町      | 20 三毳窯跡 佐野市   |                |
| 7 若林 沼南町       | 14 東台 ふじみ野市    | 21 三和窯跡 古河市   |                |

第6図 国界地域の様相

が知られている。星間氏はさらに、「ロクロ土師器をともなう遺跡は元荒川流域の集落に多く、これらの遺跡の多くは鍛冶炉をもつ住居跡が存在することに注目し、さらに、鉄生産の遺跡が多く見られる。」と言及している。下総国の葛飾郡域にも前述したように、こうした鉄生産遺跡が多く認められる傾向がある。

この国界の地域の特徴は河川にある。この地域は、関東平野を流れ、下総台地や大宮台地を流れた中小の河川流域であり、川砂鉄採取が容易な地域として捉えられる。葛飾郡・埼玉郡・足立郡地域の生産物は砂鉄であり、私探による砂鉄採取にあつたと考えられる。当時の古代社会において鉄生産は、手工業生産であり、砂鉄採取は、人々にとって許された国家支配に左右されない生産活動であったと見られる。この地域は、砂鉄を媒体として、土器流通のある常陸国や武藏国との交易を行うことで、両地域の土器が流通していたのではないだろうか。やや大胆な発想になってしまったが、国界地域の共通する要素は、河川による地域間交易であり、その商品が共通しているものであつたと考えた。

## 6まとめ

古代令制国の領域支配は、7世紀中葉の孝德朝の立評、7世紀後半の天武朝の国界設定、7世紀末から8世紀初頭の飛鳥淨御原令や大宝律令の制定により、行政単位の枠組みが明確になり、国司の派遣、郡司の任命などを行われていった。こうした現象は一律ではなく、地方官衙の成立が段階的に形成されていたことがこれまでの研究で明らかにされている。

田尾誠敏氏は、8世紀中葉を土器生産体制と国内流通体系の再編成と捉え、いまだ残存する伝統的な生産・流通体制を払拭する意味を持っていたと指摘している（田尾2009）。その背景については、福田健司氏や国平健三氏の考えを引用し、「地

域別土器群の土師器壊」や「国別タイプの土師器壊」の成立する背景に国府・国分寺造営が契機となつて土器生産体制が整備されたと考えを示された。そして、この二期が、国界の形成と捉え、令制国の成立であり、律令体制の整備と述べている。

8世紀第2四半期が、国窯の生産流通が見られ、大きな画期である。国窯とした窯跡には、武藏南比企窯跡・常陸新治窯跡・下野三毳窯跡があげられ、国型窯は8世紀後半に安定する。

8世紀末から9世紀初頭には、在地有力層の経営による末野窯跡・東金子窯跡・三和窯跡など地方窯の製品が流通し、国界の地域に搬入される。

土師器の生産や流通は、国界とは無縁のように見えた。しかし一方で、須恵器や鉄生産や瓦生産は、国を越えて生産・流通が行われておらず、同じ手工業生産において、国や郡の単位で領域間が成立し、8世紀の前半には、古墳時代的生産と流通の関係は、律令的生産と流通の関係に転換していたと考えることができる。そして、こうした律令的生産関係は、9世紀になって在地有力層の経営する須恵器窯の生産品が流通することで、再び、地域社会の様相に即した流通関係が再構築したものと考えることができる。

註1 第1・2図「庄和地域の土器（1）・（2）」の図版は、『春日都市史』庄和地域編の中で作図したもので、市史から引用した。なお、本市史は、現在叢書集作業を行っており、『研究紀要』での引用が先行した。

註2 第3図「加地区遺跡群の土器」の図版は、山根正教氏が『加地区遺跡群IV』「奈良・平安時代の土器」の中で土器の産地を詳細に分析している。その内容をもとに産地別編年表を作成したものである。

註3 第4図「八木崎遺跡の土器」の図版は、田中広明氏の『八木崎遺跡』「八木崎遺跡出土の土器について」より引用したものである。

註4 第5図「須恵器供給変遷図」の図版は、「古代武藏国の須恵器流通と地域社会」より作成したものである。

註5 第6図「国界地域の様相」の図版で郡域の境界は、「日本古代道路事典」を参考に作成したものである。

#### 引用・参考文献

- 赤熊浩一 2006 「古墳時代の河川交易」『研究紀要』第21号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 赤熊浩一 2007 「古代武藏国の鉄生産－箱型炉と豎形炉」『研究紀要』第22号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 赤熊浩一 2008 「武藏国形成過程の構造－8世紀の郡家の瓦を中心に－」『研究紀要』第23号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 春日部市教育委員会 2007 「原始・古代資料－考古－」春日部市庄和町史編さん資料（十四）
- 川根正教 2000 「考察奈良・平安時代の土器様相」「加地区遺跡群」IV 流山市教育委員会
- 古代交通研究会 2004 『日本古代道路事典』
- 埼玉考古学会 2006 「古代武藏国の須恵器流通と地域社会」埼玉考古別冊9 埼玉考古学会50周年記念シンポジウム
- 佐々木義則 2007 「常陸型壺の生産と流通」「婆良岐考古」第29号 婆良岐考古同人会
- 田尾誠敏 2009 「令制国の成立と土器の流通－相模国と隣接地域の諸相（予察）－」『古代地方行政単位の成立と在地社会』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 高橋一夫 2010 「常陸型壺と武藏型壺」『埼玉考古』45 埼玉考古学会
- 田中広明 2002 「八木崎遺跡の出土土器について」『八木崎遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第281集
- 田中広明 2005 「古代東国の地域社会と土器の流通」『國土館考古学』創刊号
- 鶴間正昭 2001 「関東における律令体制成立期の土師器供養具」『東京考古』19号 東京考古談話会
- 富田和夫 2009 「移民の携えた土器」『古代社会と地域間交流－土師器からみた関東と東北の様相－』 国立館大学考古学会
- 鳥羽政之 2004 「地域社会の変容と評家の形成」『歴史評論』655
- 長谷川厚 1995 「東国における7世紀への胎動」「古代探覗」IV 早稲田大学出版部
- 長谷川厚 1995 「東国における律令体制成立以前の土師器の特徴について－東国土の土師器の画期と生産・流通のあり方を中心にして－」『東国土器研究』第4号
- 星間孝志 2006 「ロクロ上部器の流通」『古代武藏国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古別冊9 埼玉考古学会50周年記念シンポジウム

設立30周年記念

**研究紀要 第25号**

2011

平成23年3月14日 印刷

平成23年3月24日 発行

発行 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台四丁目4番地1

<http://www.saimabun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 株式会社文化新聞社